

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520515

研究課題名(和文) フランス語における不定名詞句UN Nの内包的解釈について

研究課題名(英文) On the Intensional Interpretation of the Indefinite Noun Phrase UN N in French

研究代表者

長沼 圭一 (NAGANUMA, Keiichi)

愛知県立大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90514646

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：2011年度は、通常不適切とみなされることの多い「Il est UN N」型のコピュラ文に焦点を当てて考察を行った。2012年度は、総称の解釈を持つ不定名詞句UN Nについて考察を行った。2013年度は、非特定解釈の不定名詞句UN Nについて、総称解釈の不定名詞句UN Nとの比較から考察を行った。2014年度は、内包解釈と呼ばれているUN Nについて、非特定解釈の不定名詞句UN Nとの比較から考察を行った。

研究成果の概要(英文)：In the academic year 2011, I made a study, focusing on copulative sentences of the type "Il est UN N" which are often considered to be improper. In the academic year 2012, I made a study of the indefinite noun phrase UN N which has the generic interpretation. In the academic year 2013, I made a study of the indefinite noun phrase UN N of the nonspecific interpretation, comparing it to that of the generic interpretation. In the academic year 2014, I made a study of the indefinite noun phrase UN N of the intensional interpretation, comparing it to that of the nonspecific interpretation.

研究分野：人文学

キーワード：仏語学 不定名詞句 内包 属詞 総称 非特定の

1. 研究開始当初の背景

フランス語学の分野においては、大きな流れとして動詞研究と名詞研究が存在していた。動詞研究としては半過去が、名詞研究としては定名詞句が大きなテーマとして取り上げられてきた。したがって、これらのテーマに関する研究は多く存在し、名詞研究において定名詞句はしばしば研究対象として扱われてきた。近年、定名詞句に代わって、無冠詞名詞を対象とする研究が増えるようになり、Anscombe (1982), Picabia (1983) から始まって、Giry-Schneider (1991), Curat (1999) など多くの研究に発展している。

しかしながら、その一方で、不定名詞句に関する研究はあまりなされていないと言わざるをえない。確かに、松原 (1978), Corblin (1987), 一川 (1989) など、不定名詞句に言及している研究は存在するが、これらの研究における不定名詞句の位置付けは、定名詞句や無冠詞名詞を含む冠詞論全体の中での記述に過ぎず、いわば副次的なものでしかなかった。

研究者は、長年無冠詞名詞句の研究に携わってきたが、ここ数年の研究において、無冠詞名詞句と不定名詞句との比較研究を通じて不定名詞句の重要性を見出し、さらに不定名詞句そのものの研究を始める中で、これまでの先行研究では決して語られることのなかった可能性を不定冠詞に見出すに至った。

2. 研究の目的

フランス語における冠詞の研究のうち、定冠詞と無冠詞についての研究は多く見られるが、不定冠詞の研究はそれほど数多くは見られない。この不定冠詞を含む不定名詞句 UN N に着目し、通常そこに見出される数量的解釈ではなく、名詞が表す対象の性質を前面に出していると解釈できる不定冠詞の「内包的」用法について考察を行い、そのメカニズムを明らかにする。

3. 研究の方法

研究者は平成 22 年度において否定文の直接目的補語に現れる不定名詞句 UN N について考察を行った。その結果、このような不定名詞句 UN N の中には名詞が表す対象の内包と結びついていると考えられるものがあることを見出した。この内包と結びついている不定名詞句は他の環境にも現れるであろうと考えられるため、不定名詞句の内包的解釈というテーマでフランス語の不定名詞句 UN N について考察を行うこととする。

平成 23 年度は属詞位置に現れる不定名詞句を研究対象とする。属詞位置に現れる不定名詞句 UN N を含む例を、紙媒体やデータベース等から収集する。必要に応じて収集された例に変更を施し、可能な発話であるかどうかをインフォーマントチェックし、可能な発話である場合には元の発話とどのようなニュアンスの違いがあるかを確認する。属詞位

置に現れる不定名詞句について関連する先行研究を参照し、必要な情報を集める。以上の過程を経て、得られたデータや結果をもとに分析し、考察を行う。

平成 24 年度は総称的解釈の不定名詞句 UN N を研究対象とする。総称的解釈の不定名詞句 UN N を含む例を、紙媒体やデータベース等から収集する。必要に応じて収集された例に変更を施し、可能な発話であるかどうかをインフォーマントチェックし、可能な発話である場合には元の発話とどのようなニュアンスの違いがあるかを確認する。総称的解釈の不定名詞句 UN N について関連する先行研究を参照し、必要な情報を集める。以上の過程を経て、得られたデータや結果をもとに分析し、考察を行う。

平成 25 年度は非特定の解釈の不定名詞句 UN N を研究対象とする。非特定の解釈の不定名詞句 UN N を含む例を、紙媒体やデータベース等から収集する。必要に応じて収集された例に変更を施し、可能な発話であるかどうかをインフォーマントチェックし、可能な発話である場合には元の発話とどのようなニュアンスの違いがあるかを確認する。非特定の解釈の不定名詞句 UN N について関連する先行研究を参照し、必要な情報を集める。以上の過程を経て、得られたデータや結果をもとに分析し、考察を行う。

平成 26 年度は前年度対象とする非特定の解釈の不定名詞句 UN N との比較から、内包解釈と言われる不定名詞句 UN N を研究対象とする。内包解釈の不定名詞句 UN N について言及している先行研究を元に、内包解釈の不定名詞句 UN N とは何かを探り、それに該当する例を紙媒体やデータベース等から収集し、その特徴について分析を行う。

4. 研究成果

平成 23 年度は、不定名詞句 UN N の内包的解釈の研究の一環として、フランス語においては通常不適切とみなされることの多い Il est UN N 型のコピュラ文に焦点を当てて考察を行った。実例の分析からこのようなコピュラ文の多くは属詞名詞が修飾語句を伴っていることが分かった。修飾語句として見られたのは主に形容詞または de + 名詞句であった。形容詞はほとんどが質を表すものであり、主観的評価に関わっていた。この場合、UN N + Adj. は集合の存在を前提としておらず、内包に関わる記述であった。一方、de + 名詞句における名詞句の多くは限定詞付きの名詞か固有名詞であり、これには二つのタイプが観察された。一つは de + 名詞句が UN N の範囲を限定しているタイプであり、この場合は集合が前提にあり、UN N + de + SN はそこから抽出であると考えられる。もう一つは UN N が主語と de + 名詞句との関係を示しているタイプであり、この場合は必ずしも集合からの抽出は含意されていないと考えられる。また、属詞名詞が修飾語を

伴わない例に関しては、集合からの抽出であるものと、集合を前提とせずに内包が表に現れているものの両方が見られた。内包が表に現れている例については、いわば vrai が省略されており内包が積極的に前面に出ていると解釈できるものと、必ずしも積極的に前面に出ているわけではないと解釈できるものが見られた。以上の内容を論文「フランス語における属詞位置に現れる不定名詞句 UN N について」として発表した。これにより、不定名詞句 UN N の解釈に関する新たな分析を示すことができたと考えられる。

平成 24 年度は、総称の解釈を持つ不定名詞句 UN N について考察を行った。一般に、フランス語における総称文の主語名詞句は、Les chats sont carnivores. / Le chat est carnivore. (ネコは肉食である。)に見られるように、LES N や LE N のような定名詞句の形で現れるが、Un homme ne pleure pas. (男は泣いたりしない。)のように主語位置の不定名詞句 UN N が総称を表していると解釈できる例も見られる。このような不定名詞句 UN N を主語とする総称文については、これまで、多くの場合モダリティー表現を伴った主観的・評価的記述であり、特定の個体を想定した発話であることが指摘されてきた。総称文の主語として現れる UN N の名詞を観察してみると、大部分は、職業、身分、国籍、性別などを表す名詞であり、コンピュータの属詞位置に無冠詞で現れる名詞と同じタイプの名詞であることが分かる。このタイプの名詞は、社会的・文化的分類の操作が働いており、分類すべきクラスがあらかじめ設定されているという特徴を持っている。このことから、このような名詞に対しては、すでに一般に認められている社会的規範やステレオタイプなどの評価が構築されており、それによって、主観的・評価的内容を記述する総称文に容易に用いられうると考えられる。また、UN N の形で現れているのは、発話の原因となる特定の個体が語用論的に存在していることが示唆されていることによると推測される。

平成 25 年度は、フランス語における非特定の解釈の不定名詞句 UN N について、総称的解釈の不定名詞句 UN N との比較から考察を行った。Je vais attraper un poisson. (私は魚を捕まえるつもりだ。)という発話において un poisson という不定名詞句は二通りの解釈が可能である。一つは聞き手にとっては未知の魚であるが話し手にとっては既知の魚であるという特定の解釈、もう一つは魚であればどの魚でもよいという非特定の解釈である。この非特定の解釈の不定名詞句 UN N が、平成 24 年度に研究対象とした Un homme ne pleure pas. (男は泣いたりしない。)のような例に見られる総称的解釈の不定名詞句 UN N と大きく関連していることが見えてきたため、これら 2 つの不定名詞句 UN N の比較を行い、その共通点と相違点に

ついて考察を行った。この 2 つのタイプ of 不定名詞句は本質的には異なるものではなく、非特定の解釈の UN N が主語の位置に現れた場合に総称的解釈が生じるに過ぎず、いわゆる総称的解釈の UN N は非特定の解釈の UN N の一変種であると考えられることを主張した。また、不定名詞句 UN N そのものが総称的解釈を持つことはなく、非特定の解釈の UN N が主語位置に現れることにより、文全体に対し超時性、非出来事性が要求され、結果的に総称文として解釈されることになるという分析を行った。

平成 26 年度は、フランス語において内包解釈と呼ばれている UN N について、非特定の解釈の不定名詞句 UN N との比較から考察を行った。稲葉 (2010) は直接目的補語の位置に現れる UN N について、特定解釈、非特定解釈と対立する第 3 の解釈として内包解釈を挙げている。確かに、任意の個体を抽出することができる現実レベルでの N の集合の存在前提があるか否かという点において、非特定解釈と内包解釈の間に違いを見ることはできるが、通常は特定解釈でないものを非特定解釈と捉えるのが一般的であり、また非特定解釈と内包解釈の間に統辞的な振る舞いの違いが見られないことから考えて、内包解釈は非特定解釈の一種であると捉えることが妥当であると言える。しかしながら、非特定解釈と内包解釈をよく観察してみると、内包解釈の方には UN N が譲渡不可能な性質を持つという特徴が見られる。さらに、内包解釈の UN N の例を収集し分析してみると、UN N が行為を表しているタイプ、UN N が状態を表しているタイプ、UN N が人や物を表しているタイプの 3 つに分類することができるが、すべてイベントという概念に集約すると考えられ、UN N が安定した存在と結びついていないことが分かる。また、Furukawa (1986) は非特定解釈の UN N に関して、発話時点では非特定のであっても未来の時点において特定のなりうることを指摘しているが、これを時間軸ではなく談話世界の変化として置き換え、現働世界において非特定のであるものが潜在世界においては特定のになると捉え直すことにより、非特定解釈も内包解釈も共通の一つのメカニズムによって説明することが可能となる。以上のことから、内包解釈は一般的な非特定解釈とは異なる側面も持つものの、基本的には非特定解釈との共通点が多く、非特定解釈の中に含まれるものであると考えることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

長沼圭一、「フランス語における属詞位置に現れる不定名詞句 UN N について」、『愛知県立大学外国語学部紀要 (言語・文学編)』、

査読無、第 44 号、2012、pp.131-154 .

長沼圭一、「フランス語における総称的用法の不定名詞句 UN N について」、『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』、査読無、第 45 号、2013、pp.199-217 .

長沼圭一、「フランス語における非特定の解釈の不定名詞句 UN N について 総称的解釈との比較による一考察」、『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』、査読無、第 46 号、2014、pp.181-194 .

長沼圭一、「フランス語における内包解釈の不定名詞句 UN N について 非特定解釈との比較による一考察」、『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』、査読無、第 47 号、2015、pp.45-60 .

〔学会発表〕(計 1 件)

長沼圭一、「フランス語における否定文の直接目的補語として現れる不定名詞句 UN N について」、『国際セミナー日本語とフランス語：対照言語学的アプローチ、2011 年 5 月 15 日、名古屋大学国際開発研究科(愛知県・名古屋市)』.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

長沼 圭一 (NAGANUMA, Keiichi)

愛知県立大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90514646